

開催報告

2015年度テーマ別連続講座『身近な貧困 いま私たちに何ができるか』 第2回子どもの貧困…外国にルーツを持つ子～助けてと言えない子どもたち

日時：2015年11月30日（月）10時～12時

会場：パルシステム東新宿本部2階 第1会議室

共催：パルシステム東京、生活サポート生協・東京

参加者：30名

まずはアイスブレイク！

「外国にルーツをもつ人、身近にはいますか？」
「距離感はどれくらい？」身体を動かし、今回のテーマを学ぶための心と身体の準備をするアクティビティからスタートしました。



事例報告「外国につながる子どもたちの現状、ピナットの子どもと貧困」

市民団体 ピナット～外国人支援ともだちねっと・新居みどり氏

ピナットは「日本生まれで、外国につながりを持つ子どもたち」に寄り添い、「音読」「漢字の読み書き」「学校からのお便りを読む」といった学校の宿題を支援しています。

日本語が母語ではない保護者は、日本語がわからないため正しい情報が得られず、生活に困窮していても相談できなかったり、進学を希望している子どもがいても、手続きがわからず進学をあきらめたりすることがあります。子どもの学習支援だけでなく、学校や行政との架け橋にもなること、お母さんを支えることも大切な支援です。

本来、子どもを育てるときは、お母さん自身が安心して話せる言葉（母語）で、子どもに言葉のシャワーをたくさん浴びさせてあげることが大切です。それにより言葉の概念を自然と学ぶと言われています。しかし、子どものためにと片言の日本語で子どもを育てているお母さんが多いため、絶対的に言葉の量が少ない中で育つ子どもは概念的なことが苦手になると言われています。結果、言葉のつまづきが生じやすくなり授業についていけない、勉強がわからない、宿題ができないなどと怒られる中、子どもたちは「できないのは自分がダメだから」というように自己肯定感が低くなってしまいます。

また、日本語や勉強ができないことは進学や就職を難しくし、それが貧困の問題にもつながります。生活費や支援の不足は家族が幸せに暮らす環境に大きく影響するといえます。

（パルシステム東京 HP 報告記事より抜粋）

日本語が話せるのに、どうして支援が必要なのか

日本語がわからないため、困っていることがわかってもらえない

新居さんの話を聞いて、グループトーク

コーディネーター：特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター(PARC)

理事・事務局次長の田中滋氏



「自分たちができることは何か」「もっと聞いてみたいこと」などの話に盛り上がり、すでに支援にかかわっている人、報告を聞いて初めて問題に気づいた人、知っていても何をすればいいのかわからない人、それぞれの立場でみなさん真剣にこの現状と向き合っていました。

新居さんからは「『身近なことから』ということは、とにかく自分から関わってみるということ。それによって問題が身近になります。」と話がありました。

アンケートより

*外国につながる子どもの立ち位置ってキビシイのだとはじめて知りました。
*まずできることから関わる、話してみる。行動への一歩を学んだような気がします。
*しっかりと心にとまる学習会でした。